

OKADA-ROOM Vol.8

写実と詩情

会期 2017年3月10日(金)~6月11日(日)

「畫家(が)としては、色の感覚は鋭くしかも一種のポエジーを持つてゐる餘(あま)り形を現實的(げんじつてき)に描くより自分の夢を描くことに忙しくやつて來(き)たやうである」とは、岡田を評して、画家の和田英作が語った言葉です(『エッチング』昭和14年9月号)。

岡田三郎助は、昭和14年に亡くなるまで、一貫して、アカデミックな写実の画家でした。しかしそれ以上に、和田が語る通り、岡田三郎助の作品は常に詩情に満ち、夢をうつすものであり続けたといえるでしょう。

草上につつましやかなポーズで横たわる半裸の女性像を描いた《花野》、華やかな布と女性の輝く肌の微妙な色合いが響き合う《裸婦》や、横顔や横向きの身体のラインが強調された装飾的な《婦人半身像》—岡田の作品からは、彼が光と陰のあわいに織りなされる色、触覚に訴える肌や裂地(きれじ)の風合い、装飾的に整えられた安定した構図などを追い求めたことが伝わってきます。

本展示では、《花野》《裸婦》《婦人半身像(下絵)》等、岡田の詩情や夢を託された作品をご紹介します。また、同時代の画家の、すぐれた写実力を示す作品や、詩情ただけう作品をあわせて展示します。

出品目録

- | | | | | | | | |
|---|------------|----------------------|-------|-------------|-----------|----------|---------|
| 1 | タンバリンを持つ少女 | Girl with Tambourine | 百武 兼行 | 明治14(1881)頃 | 65.0×54.5 | 油彩・カンヴァス | 個人蔵(寄託) |
|---|------------|----------------------|-------|-------------|-----------|----------|---------|

百武が外務書記官としてローマに滞在していた時期の作品と考えられる。目を伏せてタンバリンを持つ手元を見つめる少女が描かれている。右手の指先の優美なポーズは、本作の雰囲気を高めている。民族衣装をまとい、楽器を持つ少女という主題は、異国情緒を取り入れようとしたものだろう。

岡田三郎助は、幼少期に、東京・葵坂の鍋島邸内にあった百武の自宅で彼の油彩画を目にし、洋画家を志した。

百武兼行(ひやくたけ・かねゆき、1842~1884)

佐賀市片田江に生まれる。明治4年からの鍋島直大(第11代佐賀藩主)のヨーロッパ巡遊に随行し油彩画に出会い、のちロンドン、パリ、ローマで本格的に学ぶ。いち早く西洋で油彩画を学んだ洋画のパイオニアの一人。《臥裸婦》(ブリヂストン美術館蔵)は、日本人が油絵具で描いた裸婦の最も早い例である。

- | | | | | | | | |
|---|-----|-------------------|--------|-------------|------------|----------|----|
| 2 | 矢調べ | Tasting the Arrow | 岡田 三郎助 | 明治26(1893)頃 | 72.5×105.0 | 油彩・カンヴァス | 館蔵 |
|---|-----|-------------------|--------|-------------|------------|----------|----|

画塾の卒業制作として描かれた作品。描かれた人物は、画塾に来た清楚な感じの針売りの老人であったと伝わる。また、ポーズは幕末の歴史人物像集からの引用ではないかと指摘されている。

全体に暗い色調で描かれているが、この時期の岡田は、絵の具を明るく用いる方法を模索し始めていた。そして、折しも帰国した黒田清輝や久米桂一郎を通じて外光派風の色彩を知ることになった。

3	日だまり(くつろぎ)	Sunny Side (Intimité)	ラファエル・コラン	1896	60.0×81.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	------------	--------------------------	-----------	------	-----------	----------	----

岡田は明治30年から文部省留学生としてフランスへ渡り、ラファエル・コランに師事した。

本作はコランの作品で、《くつろぎ》(Intimité)というタイトルでフランスのサロンに出品されたもの。戸外で、白いロングスカート姿の女性が読書する様子が描かれている。木々の緑や、木漏れ日を受けた女性の肌・衣装が繊りなす繊細な色合いが美しい。明るい緑と白のコントラストは、この時期のコランが得意としたものであった。

ラファエル・コラン(1850~1916)

フランス・アカデミーの画家。アカデミックな描写に外光表現を取り入れた、穏健で上品な女性像を得意とした。コランの薫陶を受けた黒田清輝や久米桂一郎は、帰国後、洋画団体「白馬会」を結成、明治の洋画壇に新風をもたらすことになった。日本の美術品や花々を愛した寡黙な人物で、弟子たちは彼を父のように慕ったという。

4	花の香(エスキース)	Scent of the Flower (study)	岡田 三郎助	明治36(1903)頃	69.8×45.8	油彩・カンヴァス	個人蔵(寄託)
---	------------	--------------------------------	--------	-------------	-----------	----------	---------

西洋人と日本人と思しき二人の裸婦が描かれている。第8回白馬会展に出品された《花の香》(ウッドワン美術館蔵)構想段階の下絵(エスキース)と考えられる。

本作や《花の香》のねらいは、「香り」という感覚を、二人の裸婦を通じて伝えることであった。そうした、抽象的な感覚を人物像に託してあらかず試みは、ラファエル・コランの作品に通じるものである。

5	少女(清楚)	Graceful Girl	岡田 三郎助	明治40(1907)	43.8×33.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	--------	---------------	--------	------------	-----------	----------	----

赤衣着物の少女が、首をかしげてこちらを見つめている。髪や着物の輪郭はぼかされ、画面中央の少女の顔に観賞者の視線を惹きつける効果を上げている。

少女の顔において特に印象的なのは、きらめく大きな目である。うつくしい瞳を備え、甘さを漂わせた岡田流の美人は、雑誌の表紙や挿絵、ポスターを通じてひろく普及し、新たな美人の典型となっていった。

6	花野	Field of Flowers	岡田 三郎助	大正6(1917)	65.2×90.8	油彩・カンヴァス	館蔵
---	----	------------------	--------	-----------	-----------	----------	----

岡田は生前から、最もよくラファエル・コランの作風を受け継いだ日本人画家と評されていた。本作はコランが亡くなった翌年に描かれており、岡田にとっては師に捧げるオマージュだったのかもしれない。草上の裸婦という画題が《花月(フロリアル)》(パリ・アラス美術館蔵)等、コランの作品を思わせるとともに、対角線上に裸婦を配する構図や、裸婦の慎ましやかなポーズには工夫が見られる。

7	富士山(三保にて)	Mt.Fuji (View from Miho)	岡田 三郎助	大正9(1920)	45.5×33.3	137.3×197.5	館蔵
---	-----------	-----------------------------	--------	-----------	-----------	-------------	----

三保の松原から富士を望む風景が描かれている。現存する岡田の風景画の中では最大の大きさである。明け方の光が雄大な富士山を照らす風景を、透明感のある色彩で描いている。朝日に輝く雪を被った山頂、グラデーションをなす空や山肌の色彩が優美であり、大きさにも関わらず画面全体の調和が保たれている。

富士山は霊峰とされ、古くから描かれてきたが、近代には国家を象徴するモチーフとして描かれるようになっていった。

8 ローマの古橋 Old Bridge of Rome 岡田 三郎助 昭和5 (1930) 22.0×27.0 油彩・カンヴァスボード 館蔵

古代ローマ時代に建設されたローマ郊外の橋、ノメンターノ橋(Ponte Nomentano、現在の橋は19世紀の再建)を描いた作品。寒色を多用し、静かで抒情的な画面をつくりだしている。岡田は昭和5年に欧州視察に赴いており、ローマを訪れた際に、この橋まで足を伸ばしたことが分かる。実景を前に描いた作品ならではの新鮮な感興があらわれている。

9 少女読書 Reading Girl 岡田 三郎助 大正13(1924) 44.9×33.2 油彩・カンヴァス 館蔵

岡田は、いわばブロマイド風の、屈託のない愛らしさを強調した女性像も描くことができた。その才は『主婦之友』の表紙絵等に発揮された。本作もそうした流れに連なる作品であろう。明るい陽射しのもと、バラが咲く庭で読書する少女の姿は、ほのぼのとした幸福感を与えてくれる。

10 婦人半身像(下絵) Woman's Half Length Portrait (study) 岡田三郎助 昭和11 (1936) 62.0×47.5 パステル・紙 館蔵

昭和期の名作《婦人半身像》(東京国立近代美術館蔵)の、パステルによる下絵。曲げた腕や、顎あたりの陰影など、下絵ながら丹念に描かれている。また、本作の画面右手には左手の親指のみが描かれていることから、より優美な指の表現を検討していたことが分かる。

11 裸婦 Nude 岡田三郎助 昭和10(1935) 99.8×65.5 油彩・カンヴァス 館蔵

昭和10年、若手、中堅の画家たちによって開催された第二部会展に友情出品された作品。周囲に配された染織品が、裸婦のきめ細やかな肌を明るく引き立てている。本作は、岡田没後に開催された遺作展に展示された後、旧李王家美術館(現在の徳寿宮美術館、ソウル市)所蔵となったが、長らく一般には公開されることがなかった。

12 薔薇 Roses 岡田三郎助 昭和6(1931) 45.5×37.9 油彩・カンヴァス 館蔵

岡田は題材として特に薔薇を好み、多く描いた。本作はその中でも、飽くことなく眺めていたくなるような深みと親しみやすさをそなえた、味わい深い一枚である。

額縁は裂(きれ)をあしらい、外枠に漆を塗った凝った作りで、岡田自身による見立てである。岡田は裂や着物の収集家であったが、額に古裂を用いて作品と組み合わせ、その調和を楽しむこともあった。

13 老人像 Portrait of an Oldman 岡田三郎助 明治34(1901) 65.3×48.5 油彩・カンヴァス 館蔵

フランス留学最後の年に描かれた作品。髪やひげ、たるんだ肌の感じなど、質感表現が見事だ。色調は淡い褐色によって統一されている。藤島武二が留学中に描いた《老人像》と比べ、本作では、老人そのものより、触覚に訴えかけるような皮膚の表現が追求されている。また、余白、老人のポーズ、色調によって作品を包む情趣が醸し出されている。藤島と岡田の特質の違いを示す好例である。

14 老人像

Portrait of an
Oldman

藤島武二

治41-42 (1908-09)

59.0×43.7

油彩・カンヴァス

館蔵

本作は、藤島が、イタリアで肖像画を得意とした画家カロリユス＝デュランに師事した時期の作品である。全体にやや粗いタッチで、しかし額や鼻の辺りなど巧みな写実性をもって老人を描いている。藤島はのちに絵画の装飾性や単純化を追求していくが、本作では、老人の容貌を写すことで、その内面や本質を描き出そうとしているようである。

藤島武二(ふじしま・たけじ、1867～1943)

鹿兒島出身。はじめ日本画を学んだのち、洋画に転向。曾山塾(のちの大幸館)や山本芳翠のもとで学んだ。東京美術学校の西洋画科新設の際には助教授となる。明治38年から文部省留学生として渡欧、フランスとイタリアで学んだ。岡田三郎助と画壇の双璧をなし、共同で本郷洋画研究所を運営した。第1回文化勲章を受章。

15 英国風景

Scenery of
England

高木 背水

明治44(1911)

35.5×50.9cm

油彩・カンヴァス

館蔵

けぶるような筆致で、緑ゆたかで湿潤な景色が描き出されている。サインから、本作は英国留学中にラフトン(Loughton)で描かれたことが分かる。ラフトンはイングランド東部に位置するエセックス州の町である。高木背水は留学中、現地で活動していた画家・石橋和訓の紹介でレナード・ヒル(本業は生理学者・医師)に師事したが、ヒルは1902年からラフトンに住んでいた。

高木背水(たかぎ・はいすい、1877～1943)

佐賀市松原に生まれる。本名誠一郎。11歳で単身上京。明治26(1893)年頃から岡田三郎助を知り、画塾大幸館に入り本格的に洋画家を志す。雅号「背水」は「画家として“背水の陣”で精進する」という決意を示す。明治天皇の肖像画を描いたことで知られる。大正4～末年の間は朝鮮にアトリエを構え、現地の美術の振興に尽力した。

16 婦人肖像

Portrait of a Lady

高木 背水

大正4 (1915) 頃

96.6×71.3cm

油彩・カンヴァス

館蔵

白いドレスと毛皮の描き分けや、指先の繊細な表現に、高木の技術の高さが見て取れる。モデルは、村井吉兵衛の一人娘・久子。村井は日本で初めて紙巻き煙草を製造販売したことで知られる実業家である。明治41年に村井の別荘(京都の長楽館)の壁画を制作したことが機縁になり、高木は村井の援助を受けて渡英、ヨーロッパ留学の夢を果たした。

17 朝日

Sunrise

青木 繁

明治43(1910)

72.9×115.2

油彩・カンヴァス

佐賀県立小城高等学校
同窓会賛成会蔵
(当館寄託)

うねる波に日光が映える、青木の絶筆とされる作品。青木は明治43年、療養のため唐津を訪れた。本作はそのとき唐津の海に着想を得て描いたもの。不同舎時代の同輩で、小城中学校の教員であった平島信の斡旋で、同校に納められたと考えられる。本作の描写は、かつて布良で描かれた海景とは異なる静けさを帯びている。2年余りを佐賀で過ごした青木は、翌年、福岡市の病院で息を引き取った。

青木繁(あおき・しげる、1882～1911)

久留米市に生まれる。森三美から洋画のてほどきを受け、不同舎を経て東京美術学校に入学。神話・説話を題材とする画稿で脚光を浴びた。明治37年、千葉県の布良で《海の幸》(ブリヂストン美術館蔵)を描く。明治40年、東京勸業博覧会に《わだつみのいるこの宮》(ブリヂストン美術館蔵)を出品、三等賞に終わる。同年帰郷、中央画壇に帰らぬまま28歳で病没した。

佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀県佐賀市内1-15-23
TEL. 0952-24-3947 FAX. 0952-25-7006

E-mail. hakubi@pref.saga.lg.jp Web. http://saga-museum.jp/museum/